# 水の重要さを知る。

～安全な水を世界中に～

2年4組9番

# 「100の診療所より用水路」中村哲医師が変えたアフガニスタンの暮らしから考える。

去年、アフガニスタンで武装勢力に銃撃され、死去した日本人の中村哲医師が、アフガニスタンに診療所を始めた2000年、次々に運び込まれてくる体が弱った多くの子供たち。その原因は**水**でした。

のどの渇きに我慢できない子供たちが泥水を飲んでいる様子に見るに堪えなくなった中村医師は井戸掘りを始めました。

医師の仕事とはかけ離れた、長い長い闘いが始まりました。

# 井戸掘り中に起きた事件

2001年の9月11日「同時多発テロ」が起きる。タバリン政権下のアフガニスタンが空爆の標的になったのです。

戦争が起きた影響で、干ばつに苦しむ農村地帯の人々は、仕事や食料を求め首都カプールに。

「難民を外に出してはならない」という強い意志の元中村医師は「日本での募金活動」。

困窮を訴え、1か月で2億円の寄付を集めた中村医師は、食糧支援を開始。1家族当たり3か月分の食料が配布され、27万人の命をつなぐことが出来ました。

# 英雄、中村哲医師。

避難先のパキスタンから戻った中村医師たちが目にしたのは、戦争で農民がいなくなり、井戸が機能しておらず、干上がった大地でした。

そこで、中村医師は雪解け水が流れる川から少し離れた干上がった農地まで、用水路を引くという「用水路計画」を発案しました。猛反対した日本人スタッフを説得し用水路建設を開始しました。着工から1年経った2004年3月。1500メートルの用水路が完成しました。2007年には13キロまで完成。

用水路のおかげで稲やトウモロコシなどの多くの作物が実り、人々の心に希望が宿ったのです。

# アフリカの水問題

2019年において、世界人口の半数が水道を使えるようになったといわれてますが、いまだに6億6300万人もの人が、今も安心して飲める水を確保できていない状態で暮らしています。

その半数がサハラ以南のアフリカに集中しているのです。

さらに、2017年の段階で年間にして約30万人、毎日800人以上の乳幼児が下痢症で命を落としています。

# 世界における水とトイレの問題

人にとって安全な水は何よりも必要なものです。生きていく上で欠かせないものであり、毎日必用なものです。

しかしただ使えるだけなく、安全に管理されたものでなければ、健康に被害をもたらす可能性があります。

それは衛生設備も同様であり、衛生的に管理された施設がなければ、疫病が発生する可能性が高くなります。

実際に水不足や劣悪な水質、衛生施設の不備は教育や医療に悪影響を及ぼしています。

その影響は特に開発途上国に多く見られ、サブサハラアフリカや西アジア、南アジアなどでは深刻な状況となっています。

さらに衛生施設の中でも区画されたトイレの存在は、人の尊厳にも関わります。トイレがない地域では、屋外排泄などを余儀なくされることも少なくありません。

その姿を他人に目撃されるのは、人としての尊厳を傷つけることになります。特に思春期の女の子や女性にとっては耐え難い屈辱となる可能性が高くなります。

心身の健康にとって、安全で管理された衛生施設の存在はなくてはならないのです。

# 身近にできる節水

人間は1日当たり約219リットルも使っています。

身近なものに、洗面などがあります。洗面は1分間流しっぱなしの場合役12リットルの水が流れます。

他にも、歯磨きを1分間流しっぱなしの場合約6リットル、食器洗いを5分間は約60リットル、洗車は約90リットル、シャワー3分間は約36リットルなど気づかないうちにかなりの量を使っています。

水道は使ってないときは止めるなど私たちにできることを見つけて実践しましょう。

私は、アフリカのタジン鍋を参考にして「無水カレー」を作ってみました。

普段は入れないトマトをたくさん使って、カレーにしました。

水750ccをトマトの水分で代用しました。

# まとめ

人類と水は切っても切り離せない関係ですが、水を十分に得られていない人がいるのも事実です。

異常気象などで水不足に悩まされている人も少なくありません。泥水など、衛生的に問題があり自由に飲めない場合もあります。

安全な水を十分な量手に入れられる人を増やすため、目標6の「安全な水とトイレを世界中に」が掲げられました。

実現に重要なのは、水を供給するインフラ」を整備することです。
施設が整っていなければ安全な水を提供できません。

社会や環境に負担を与えずに水を管理するのも取り組むべき課題の1つです。